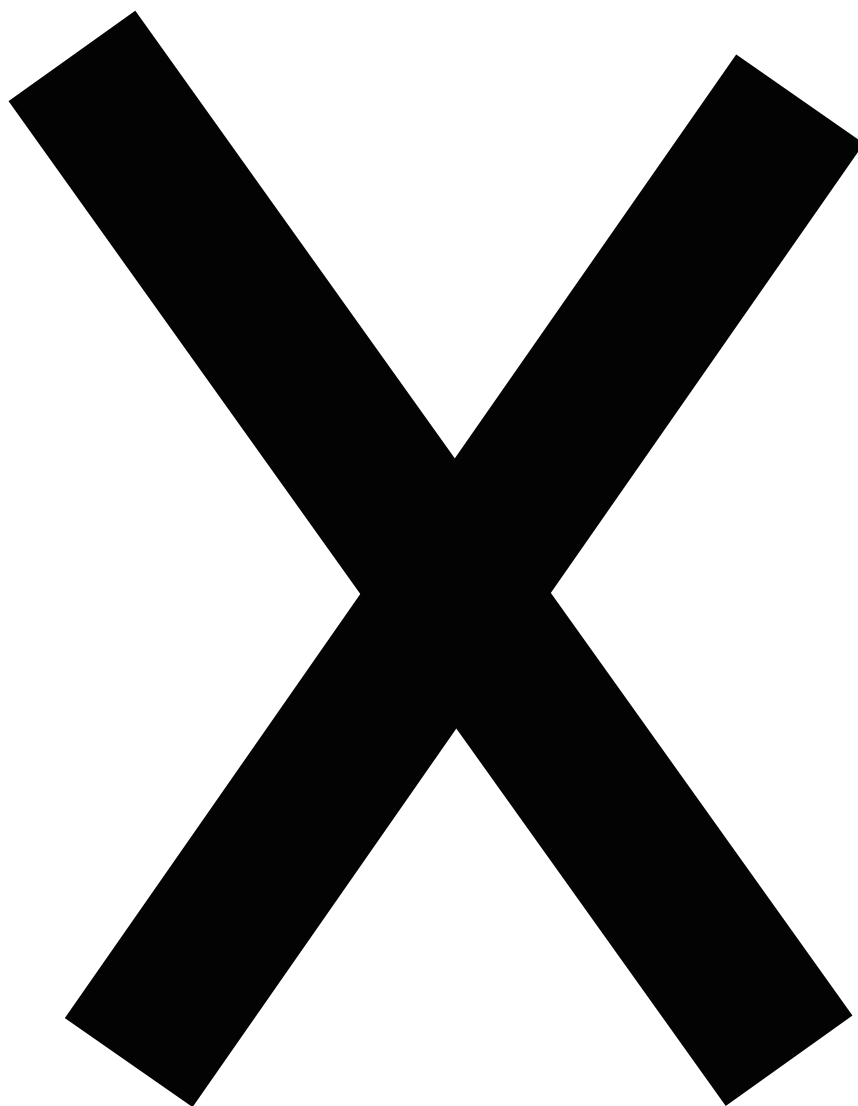


戊辰150年企画

# 丹羽 二本松藩



## すじかいもん 直違紋の由来

二本松藩主・丹羽(にわ)家の家紋である直違紋(「違い棒」とも言っている)。この紋のおこりについて、従来の伝えでは、織田信長公のもと、織田四天王といわれた丹羽長秀公の馬印(大将の存在を示すしるし)は、竹の枝に金の短尺を飾り付けたものであって、「えづる竹に金の短尺」と称されていた。合戦が終わってこの馬印をみたら、奮戦のため

に短尺は散ってしまい、2枚だけがバツテン十字状に残っていたので、それが丹羽家の家紋となったというもの。また他説には、合戦の後で、血の付いた刀を袖で拭いた後に、バツテン状に血のりがついたので、秀吉から「家紋としたがよかろう」との言葉があって、この紋と定められたとも伝えられている。

今から150年前、奥州二本松藩は激動の時代の波にのみ込まれ、戊辰戦争の中でも激戦の一つとされる二本松の戦いの舞台となりました。時は江戸時代末期。長らく太平の世が続いており、誰もが、この地に攻め入る者があるとは想像もしていなかったことでしょう。

慶應4（1868）年1月の鳥羽・伏見の戦い以降、帝を擁して官軍を称する薩摩藩・長州藩を中心とする勢力は、徳川幕府打倒の武力行動を起こしましたが、時の將軍・徳川慶喜の徹底的な恭順行為により、その行き場がなくなりました。

戊辰戦争における東北諸藩への進攻は、薩摩・長州両藩から最大の憎しみを受けていた会津藩・庄内藩を標的としたものであり、二本松藩は不幸にも、その進攻の途上に位置することになります。

戊辰戦争における二本松藩の戦死者は、老兵、少年兵、農兵等を含め337人。二本松藩には、猛烈な勢いで進攻する新政府軍に降伏、恭順という選択肢もありましたが、徹底抗戦する道を選択しました。そこには、どのようないきさつがあったのでしょうか。また、新政府軍を迎え討つこととなった二本松藩は、どのような行動を取ったのでしょうか。

戊辰戦争から150年後の現代に至るまで、日本はさまざまな戦争を経験してきました。現在の平和な時代を過ごすことができるのも、数多くの貴い行為の上に成り立っているといっても過言ではありません。

戊辰戦争から150年を迎えるに当たり、この地で起きた戦争を私たちは、あらためて見つめ直す必要があるのではないのでしょうか。

二本松藩主の丹羽家とは、いわゆる外様大名で徳川譜代の大名ではありません。織田信長、豊臣秀吉の時代に勢力を拡大した、安土・桃山時代を代表する大名でした。

二本松藩が戊辰戦争の際、奥羽越列藩同盟の東北諸藩の先鋒となつて新政府軍と徹底抗戦することとした大きな理由は、二本松藩主・丹羽家の歴史とこの家風が大きく影響しているといわれています。

ここでは、初代当主の丹羽長秀公から、三代目当主であり二本松藩初代藩主の丹羽光重公の説明をし、丹羽家の歴史と家風に触れてみたいと思います。



初代当主  
にわながひで  
丹羽長秀

## 丹

羽家の初代当主は、丹羽長秀。16歳で織田信長に初出仕して以来、永禄3(1560)

年に起きた、織田家が天下取りの第一歩を刻んだ今川義元との合戦(桶狭間の合戦)などで数多くの武功を上げ、同5年には信長の異母兄の娘を妻とし、織田家の姻戚関係となります。また元亀2(1571)年には、織田家の家臣では初の城持ち大名(佐和山城主18万石)となり、天正4(1576)年には、日本初の本格的城郭建築である安土城の総普請奉行(総責任者)を務めたことでも知られています。

織田家中では、柴田勝家に次ぐ二番家老の席次を与えられ、両名は織田家の双壁と評されました。また、「木綿藤吉、米五郎佐、かかれ柴田に退き佐久間」という織

田家中の有名な戯れ言葉があります。この言葉は、織田信長の有能な家臣4人をそれぞれ指し、「木綿藤吉」とは羽柴秀吉(後の豊臣秀吉)を、「米五郎佐」とは丹羽五郎佐衛門(丹羽長秀)を、「かかれ柴田」とは柴田勝家を、「退き佐久間」とは佐久間信盛を評しています。

この戯れ言葉からもうかがえるように、木綿(秀吉)は華美ではないが重宝であるのに対し、米(長秀)は、非常に器用でどのような任務もこなし、米のように上にとつても下にとつても欠かすことができない存在であるとして、戦場のみならず実務家としても非常に高い評価を得ていました。

司馬遼太郎も小説「新史 太閤記」の中で長秀をこう評しています。「性、質朴で、言いだせばきかぬ点を、信長はむしろ愛した。

その性格は合戦の仕方にも反映し、その戦いぶりには奇策縦横の華やかさはないにしても、難戦になつても退かず、攻めにあつてはまるで大掛矢で棒杭を打ち込むような、底ひびきのする攻め方をした。」

信長の死後、長秀は秀吉方につき、織田家の跡目を決定する清須会議で重要な役割を担い、その後の賤ヶ岳、北庄の合戦で柴田勝家を攻め滅ぼし、戦功として越前国・若狭国・加賀国2郡を合わせて123万石の大大名となりました。

この長秀の働きにより、丹羽家は戦国大名の中でも名門の家柄となり、かつ、城造りの技術を持つ家柄となつていきました。



三代目当主(二本松藩初代藩主)

にわみつしげ  
丹羽 光重

**寛**永14(1637)年の長重死去により、光重は若干16歳にして丹羽家の3代当主となります。同20(1643)年には二本松への移封で初代藩主となり、安達郡69ヶ村・安積郡41ヶ村の都合10万7000石の二本松藩が誕生しました。

光重は入府後、城郭の修築および城下町の町割、村々の組編成など大規模な整備を行い、名君として家臣・領民から尊敬され続け、

延宝7(1679)年に42年の長い治世の末、家督を長男の長次に譲り、永禄14(1701)年に、享年81歳で死去しました。

このように、丹羽家は戦国大名の中でも数奇な運命をたどりましたが、二本松入府後から戊辰戦争後の廃藩まで、二本松では丹羽家の藩政が行われました。丹羽家の家風は、初代長秀、2

代長重が歩んだ道のりによりできあがったといっても過言ではなく、これが幕末まで引き継がれ、戊辰戦争では、止むに止まれぬ選択をしてしまったのも、この丹羽家家風が一つの理由だったのではないのでしょうか。

戦国以来の武勇を誇る名門故の意地とプライド、徳川将軍家への恩義、愚直なまでの律義さ、さまざまな思考や感情が相まって、戊辰戦争を迎えることとなります。



二代目当主

にわながしげ  
丹羽 長重

**初**代長秀が死去した後、丹羽家には苦難の道のりを歩くこととなります。そして、丹羽家当主の中で最も苦勞したといっても過言でないのが、2代・長重です。

長重は天正8(1585)年に15才で123万石を相続しますが、秀吉から家臣の軍令違反と謀反の疑いを掛けられ、12万3千石に減封されるとともに、それまで丹羽家を支えてきた重臣たちも、秀吉に召し上げられてしまいます。

さらには秀吉の死後、徳川家康と石田三成の対立が深まり、慶長5(1600)年には、会津の上杉景勝征伐の折、徳川方として出陣するも、不仲であった前田利長と浅井暁合戦を引き起こし、関ヶ原合戦後に家康により改易(所領

没収)され、浪人の身分となってしまう。

通常であれば丹羽家は、この段階で歴史の表舞台から消え去るところでしたが、2代将軍・徳川秀忠の世に、丹羽家は常陸国(現茨城県)古渡で1万石の大名に復活します。大名復活にはさまざまないわれがありますが、長重の大名としての実力はもとより、秀忠の妻(お江)と長重の妻が従姉妹であったこと、丹羽家の持つ築城技術が認められての復帰であることなどの説があります。

その後の長重は、棚倉に5万石の大名として移封され棚倉城を築き、続いて白河に10万7000石の大名として移封され、東北地方では珍しい総石垣造りの白河小峰城

を築城しました。

長重は、幕府から参勤交代の際の奥州諸大名の監視役の密命を受けたといわれており、幕府からの信頼も厚かったと考えられます。また関ヶ原合戦の折、石田三成方につき改易された大名は数多くありましたが、その後に10万石以上の大名として復活を果たしたのは、丹羽長重と立花宗茂の2人だけです。

寛永4(1637)年に死去する際、長重は子息、家臣に次のような遺言を残しています。

『自分がこれまでやってきたように、將軍の恩に感謝し、幕府第一として、幕僚たちと円滑に付き合え。しかし、機転を利かせすぎたり、媚び諂うのはよくない』

1817年  
それまでの藩内にあった  
21の学校を合わせて、藩  
校「敬学館」を設立する。

1845年  
この頃、歌川(安藤)  
広重が百目木を訪れ、  
「陸奥安達百目木駅  
八景」を制作する。

1858年  
6月、黒船への備  
えとして、幕府より  
富津海岸(現在の  
千葉県)警衛を  
命じられる。



10代藩主  
にわ なぐくに  
丹羽 長国

戊辰戦争の際の二本松藩主だった丹羽長国。二本松藩は1868年、奥羽越列藩同盟に加わり新政府軍と戦ったが、各地で敗戦し、7月29日、二本松城は落城。このとき二本松藩士たちは、長国を米沢藩に逃している。9月11日、長国の降伏嘆願が受理され、長国は謹慎を命じられる。10月26日、東京の前橋藩邸に移され、11月5日、官位剥奪・藩邸の没収を命ぜられる。12月7日、米沢上杉家より養子(のちの11代藩主・丹羽長裕)を迎え家名を立てることを許され、1869年9月に謹慎を解かれた。時が過ぎた1902年5月、長裕の次に家督を継いだ長保(長裕の実弟)が死去したことにより、長国は再び丹羽家の家督を相続している。

- 1868年
- 1月 京都鳥羽・伏見の戦いにより、戊辰戦争が起こる。
  - 5月 31藩からなる奥羽越列藩同盟が結成される。
  - 7月 小野新町、糠沢村、本宮の戦いで敗走する。
  - 7月29日 正午頃、二本松城が落城する。二本松藩戦死者337人、うち二本松少年隊14名戦死という悲劇を生む。
  - 9月 二本松藩降伏嘆願書が受理され、二本松藩が消滅する。
  - 12月 5万石二本松藩が復活する。

## 1868年

- 1863年 3月、幕府より江戸警衛を命じられ、同年9月、幕府より京都警衛を命じられる。
- 1864年 7月、水戸天狗党騒動で鎮撫(反乱や暴動などを静めること)を命ぜられ、出兵する。
- 1867年 3月、富津警衛より江戸湾警衛に変更される。



1834年  
久保丁口に、丹羽光重公以来の悲願だった大手門(石垣上に二階櫓(やぐら)を具備)を築造する。(写真は旧自治センター前の大手門石垣跡で、築造から30数年後の戊辰戦争の兵火により、櫓門は消失してしまう。)

1871年  
11月、廃藩置県により二本松県が誕生、まもなく福島県に統合される。

歴代藩主		在職期間
初代	丹羽 光重	寛永20年(1643) 8月 ～延宝 7年(1679) 4月
2代	丹羽 長次	延宝 7年(1679) 4月 ～元禄11年(1698) 6月
3代	丹羽 長之	元禄11年(1698) 8月 ～元禄13年(1700) 12月
4代	丹羽 秀延	元禄14年(1701) 2月 ～享保13年(1728) 5月
5代	丹羽 高寛	享保13年(1728) 6月 ～延享 2年(1745) 5月
6代	丹羽 高庸	延享 2年(1745) 5月 ～明和 2年(1765) 12月
7代	丹羽 長貴	明和 3年(1766) 1月 ～寛政 8年(1796) 3月
8代	丹羽 長祥	寛政 8年(1796) 5月 ～文化10年(1813) 8月
9代	丹羽 長富	文化10年(1813) 11月 ～安政 5年(1858) 10月
10代	丹羽 長国	安政 5年(1858) 10月 ～明治 1年(1868) 12月
11代	丹羽 長裕	明治 1年(1868) 12月 ～明治 4年(1871) 7月



1643年8月

丹羽 二本松藩誕生

白河藩主・丹羽光重は、10万700石二本松藩の誕生に伴い、初代藩主として入府する。

1658年

二合田用水の開削設計・測量担当として、算学者の磯村吉徳が召し抱えられる。

1660年

磯村吉徳が著した『算法闕疑抄』は、5版を重ねる和算書のベストセラーとして、全国にその名をはせる。

1661年

8月、二本松城内の熊野社・八幡社を合祀、栗ヶ柵に遷宮し「御両社」と称して領内の総鎮守とする。この頃、二合田用水が完成する。

1749年3月

5代藩主・丹羽高寛の命により、儒者・岩井田昨非が藩士の通用門前の露頭巨岩に、「戒石銘」を刻む。



1643年

1749年

1664年

8月、御両社の例大祭が始まる。(後の提灯祭り)

1701年

4月11日、初代藩主・丹羽光重が死去する。

1786年

二本松藩が赤子出生養育御達(※)を出す。  
※農村の窮乏により、妊娠中絶などが多く、人口減少が問題となっていた当時、二本松藩は幕府や他藩に先駆けて、独自の赤子生育法を定め、第2子が出生したら五斗入り米1俵支給などと定めた。

丹羽光重が、城下の大整備に着手し、10年余りの歳月を費やし完成する。



二本松御城郭全図(丹羽家所蔵)

この絵図は、江戸時代後期から幕末期頃の城郭を描いており、丹羽光重公入府直後に大整備した当時とあまり変わっていない。城内を中心として、御殿・蔵・馬場・小屋などの各施設をはじめ、寺院・神社の位置、および主要道路・町名などがほぼ詳細に描かれている。現在の市街地と比べても、基本的に大差はなく、350年ほど前のまちづくりが、今でも脈々と生かされている。

1646年



◀幕末期の二本松藩領図  
～『相生集』より～

相生集は、二本松藩における地誌として、近世安達郡、安積郡を網羅した歴史資料書で、市の有形文化財に指定されている。全20巻からなる相生集は、二本松藩士の大鐘義鳴により編さんされ、天保12(1841)年に完成している。

▼幕末期の二本松藩行政区分

郡名	組	村邑
安積	郡山	郡山、小原田、日出山、笹川、久保田、福原、日和田、高倉、八丁目、梅沢、八山田、横塚、笹原、新井
	片平	片平、河内、夏出、長橋、富田、早稲原、堀ノ内、前田沢、上伊豆島、下伊豆島、安子島
	大槻	大槻、只野、山口、大谷、八幡、駒屋、川田、成田、野田、鍋山、富岡、下守屋
安達	本宮	本宮、仁井田、荒井、関下、青田、苗代田、羽瀬石、下樋、青木葉、石筵、高玉、横川、中山
	糠沢	糠沢、高木、和田、白岩、長屋、松沢、稲沢、初森
	玉井	玉井、永田、深堀小屋、原瀬、箕輪、桐山、上大江、下大江、大江新田
	杉田	北杉田、南杉田、館野、高越、上成田、下成田、油井(以下府下6町) 若宮、松岡、本町、亀谷、竹田、根崎
	渋川	渋川、塩沢、小沢、吉倉、米沢、上川崎、下川崎、沼袋
	小浜	小浜、上長折、下長折、西勝田、大平、平石、鈴石、西荒井、小浜成田、下太田、外木幡
	針道	針道、内木幡、南戸沢、北戸沢、西新殿、東新殿、杉沢、茂原、百目木、田沢、山木屋、小手森、上太田
信夫	八丁目 八丁目、天明根、鼓岡、上水原、下水原	

※「相生集」第2・3稿より作成したもの。  
※現在の福島市松川町近辺の八丁目は、天保4(1833)年2月の村替えの際に受領した土地(長富公記)で、八丁目と引き換えに、山ノ内5村(現在の郡山市湖南地区)は会津藩へ村替えされた。

◀二本松藩領図を基に作成した、幕末期の二本松藩域

当時の二本松藩は、東は現在の川俣町山木屋、西は郡山市熱海町中山、南は郡山市笹川、北は福島市松川町までを治めていた。





金花猫塗唐冠兜 (伝. 丹羽長秀・長重着用)  
兜の前部に付ける飾り「前立」には、鍬形・竜頭・動物の角など多種多彩な立物があり、この兜の前立は獅子頭の一種である。当初、獅子に角を付けた形態が次第に変化していき、ついには獅子よりも鬼面に近くなり、これを「魅(ばけもの・もののけ)」の文字を当て、「しかみ」と読ませ名称とし、鬼面獅子とも称した。

二本松へ丹羽光重が入府してから210年目の嘉永6(1853)年、浦賀にペリー提督率いる黒船が来航します。これ以降、奥州に位置する二本松藩も時代の波に翻弄されるようになります。安政5(1858)年には上総国(現在の千葉県)富津砲台の警衛を、文久3(1863)年3月には江戸警衛を、同年8月には京都警衛を、さらには元治元(1864)年には水戸の天狗党鎮撫をそれぞれ幕府から命じられ、これら多くの出費により、藩財政は破綻する一歩手前の状態でした。

一方、京都では大きく歴史の歯車が動き出します。

慶應3(1867)年10月の、

15代将軍・徳川慶喜による大政奉還、そして同年12月に王政復古の大号令が発せられたことにより、260余年の江戸幕府が終焉を迎えましたが、同4年1月に旧幕府勢力を一掃しようとする薩摩藩・長州藩を中心とする討幕派と、旧幕臣、旧京都守護職の会津藩などの旧幕府軍が鳥羽・伏見で戦いとなり、旧幕府軍はこれに大敗し、賊軍の汚名を着ることになりました。

その後、新政府軍は江戸に向けて、幕府討伐に進軍しましたが、慶喜は徹底した恭順の態度を貫き、同年4月11日に徳川家の居城である江戸城は無血開城の運びとなりました。

将軍家が政権を返上し、自身の城も明け渡して新政府軍に恭順した訳ですから、新政府軍の

進攻はこれで終わってもいいはずですが、これにより戦争は終わりませんでした。

薩摩藩・長州藩を中心とする新政府軍は、その鋒先(ほざき)を将軍家から会津藩・庄内藩に向け、東北地方に進攻するに至ります。天皇の名において動員された西南諸藩の軍事力によるこれらの行動は、天皇の絶対的な新しい権威の確立を成し遂げるための最高の手段でありました。武力をもってしても東北全域を従わせ、全国統一を図る必要があったからです。結果として東北諸藩は、明治維新という革命の「犠牲」になってしまったという見方も多くあります。

次号の広報にはほんまつ7月号では、戊辰戦争における二本松の戦いについて掲載いたします。